

## 5月16日セミナーレポート

人文社会科学研究所  
哲学・思想専攻  
博士課程3年 松本秀昭

目的と目標の設定に関して、履歴篇と研究篇が二段階で問われていたのが興味深かった。履歴篇の場合、まず手段が「筑波大学大学院入学」に設定された上で、「何のためにそうしたのか」に対する質問に答える形で目標から目的へと内容を書き込んでいった。この場合、手段が漠然としているので、目的の方も「教員になる」や「研究者になる」といった漠然とした内容を書き込む人が多かったように思えた。またそれに対応した目標の方も「博士号を取る」など、漠然としたものになっていたのだろうと思う。一方で研究篇では、手段を論文のタイトルに見立てたうえで、目的から目標、手段へと内容を記入していった。この場合、目的が具体的に設定されるので、それに応じて目標も詳細で具体的になる。そして、このようにして設定された目的と目標からタイトルを設定するのだが、タイトルを決定する方法として非常に効果的な方法だと思った。

ところで、講義の冒頭で目的と目標の違いについての質問があった。『大辞泉』によると目的は「「目標」に比べ抽象的で長期にわたる目あてであり、内容に重点を置いて使う」とされている。一方で目標は「目指す地点・数値・数量などに重点があり（中略）具体的である」とされている。こうした定義を踏まえて考えてみると、研究篇の目標がより具体的になっているのは予想がつくが、目的が履歴篇に比べて研究篇は内容がより明確になっていることは発見である。

わたしは履歴篇では目的を「政治哲学の研究」としておいた。政治哲学に限定しなくとも「倫理学の研究」でも構わなかったのだが、いずれにしてもわたしの目的は自分の分野での研究であった。したがって、研究編で設定した目的は履歴篇の目的の内容そのものでもあった。わたしがもし「あなたがここに在籍している目的は何ですか」と問われたら、わたしは「政治哲学の研究」ですと、今までは答えていただろう。しかし、「何のために研究しているのか」という内容を欠いていたら、「目的」に対する答えにはなっていない。わたしは自分でも今までここに在籍している目的や理由を「政治哲学の研究」と考えていた。この講義を終え、いろいろ考えた後、いまはじめてそれが目的でも理由でもないことを自覚できた。「研究が何の役に立つのか、何のためなのか」という問いは、わたしの帰属する倫理学の領域にとっては他の領域の学問とは異なる特殊な地位を有する。その私が自分の研究の目的を自覚していなかったというのは、全くの盲点であった。

履歴というものはある意味、人生をあらわしていると言える。その目的を自覚していなかったという事実を知って苦笑してしまうが、目的と目標という言葉を通じて面白い発見ができたと思う。

## 目的と目標、手段

応用 4 年 湯本かほり

今年度で大学院生活は休学していた期間を除き、3年目になる。その間、修士論文のことを考え、修士論文が終われば今度は業績、そして博士論文のことを考えなくてはならない。それを考えると、残された時間は有限であり、その中で効率よく計画的に研究を進めていかなくてはならない。そんなことを修士論文を書き終えた今の時点で考えるようになった。

小野先生は講義の中で、目的と目標、手段といった三つのキーワードを用い大学院入学という手段が何のためなのか、あるいは自分の研究という手段が何のためにあるのかを考える機会を与えてくださった。これについて改めて考えてみると、手段は確かにあるものの、それがいったい何のための手段なのかを考えたことはなかったように思う。そして、目的と目標という概念の区別も改めて問われると両者を区別できず、何か一緒のもののように見えてしまう。

辞書にあたってみると、「目的」は「成し遂げようと目指す事柄。行為の目指すところ。意図している事柄。(広辞苑)」とあり、「目標」は「目じるし。目的を達成するために設けた、めあて。的。(広辞苑)」とある。目的がなければ、目標もないということだ。複合語においては「目的」を構成要素に持つ語には「目的地、目的語、研究目的、多目的、目的別…」があり、何か具体的な対象があるときに「目的」が使われているようだ。一方、「目標」を構成要素に持つ複合語には、「節電目標、削減目標、目標達成、目標到達、今年の目標…」とあるが、限定された期間内にある数値への到達を目指す、そのような文脈で多く使われているようだ。つまり、目的(具体的な対象)を持ったら、目標(限られた時間の中である到達すべき数値)も定めなくてはならないと考えられる。

では、このことを踏まえたうえで自身の「大学院入学」および研究テーマである「形式名詞コトの研究」というそれぞれの手段がどういった目的・目標のもとにあるのかということを見ると、次のようになる。

目的：日本語の教科書を作成したい、大学で日本語を教えたい

目標：日本語学・日本語教育の知識が必要、学位が必要

手段：筑波大学大学院入学

目的：ことばの変化を知る

目標：日本語の文法家現象のメカニズムの記述

手段：「形式名詞コトの研究」

このように目的・目標・手段を考えることは、他人に自分の研究や大学院に在籍していることを説明するには有効な手段であるといえる。話が長くポイントが明確でないと、伝えたいことは伝わらない。これまで、自分の研究について異分野の人や企業に就職している知人に説明することははばかりされてきた。どうせわからない、興味ないだろうという傲慢あるいは自身のなさがあったからだ。短い時間に、自分がどんな目的・目標をもっているか、相手が興味を持って聞いてくれるような説明の仕方をこれから心がけていく必要があるようだ。

## 小野先生の発表を聞いて考えたこと

文芸・言語専攻 応用言語学領域 4年 許 挺傑

本日は、小野先生が「目標と目的とその手段」ということをめぐってお話してくださいました。非常に共感するところが多く、大変興味深く聞かせていただきました。

先生は最初に「目標」と「目的」はどう違うかという問いを投げかけてきました。この二つの言葉がどう違うかについて普段まったく意識に上ったことがありませんでした。どちらも同じような意味だと思われたのに、実はかなりの違いがあることに驚きました。たとえば「目的はパリ、目標はフランス軍を撃破すること」という例のように、目的は目標を達成した上で、その結果をどうするかに関するものでした。

実は「目標」と「目的」という二つの似たような言葉の間にいったいどのような差異があるのかという話題は、それを通して、ある目的を達成するためにはどうしたらよいのかという議論を導入するためのものでした。さらに言えば、目標を達成するために何かを行うのではなく、何かを行うときには常にその目標の向こう側にある目的を念頭に入れて行動をすべきだというのが先生の主張であったと思います。

この話を研究の話に応用すると、おそらく以下のようなことが言えるのではないかと思います。

研究の場合は、その研究で明らかにしようとするのが目標にあたるものであろう。だが、多くの研究が目標を達成した段階で、終わってしまう。このような研究は、ある意味では「研究のための研究」といえるのかもしれませんが。しかし、重要なことは、「研究のための研究」を行うのではなく、つまり、単にある目標を達成するために研究を行うのではなく、その目標を達した上で、社会や世の中に貢献するという目的も視野に入れて研究を行うべきだという姿勢をとることでしょう。

本日の先生の発表は以上のようなことを教えてくれたと思います。

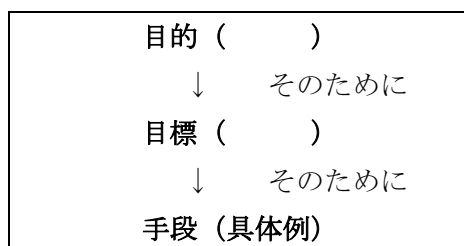
## 1. はじめに

論文を書く際、我々は研究分野を問わず、「研究の目的」という項目を必ず立てる。目的がはっきりしていないと研究をどのような方向に進め、どのような方法を使うべきかがわからなくなり、研究の全体像が見えなくなってしまう。

本講義では、研究における目的・目標・手段の意味についてまず考えた後、目的・目標・手段のそれぞれの概念がどのような相互関係になっているのかについて考えた。

## 2. 授業の概観

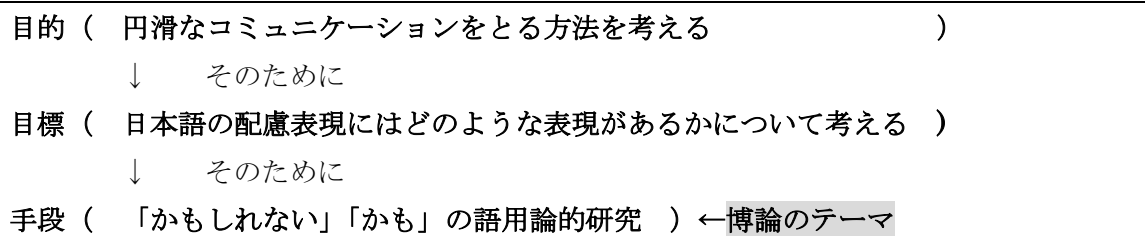
ここでは、目的・目標・手段の相関関係を明らかにするために、まず、それぞれの用語の定義からまとめていきたい。『広辞苑』(第五版)によると、まず、目的とは、「成し遂げようと目指す事柄。行為の目指すところ。意図している事柄」であり、目標は「目的を達成するために設けた目当てである。」と定義されている。また、手段とは「目的を達するための具体的なやり方。てだて。」であるとしている。これらの定義から、目的・目標・手段の関係図を表すと、以下のようなになる。



上記の関係図から、目的が一番大きい概念であって、ある目的を達成するために目標を立て、さらにその目標を達成するために具体的な手段を使うという解釈ができる。

## 3. 意見

本講義の受講生は、基本的に博士後期課程の人を対象にするため、今後、研究者・教育者になるという目的を持って、そのために博士論文を完成するという共通目標を持っていた。しかし、研究の場合、それぞれ専門も異なるため、各自、自分の研究における目的・目標・手段を考え、話し合ったが、自分の研究の関係図は以下のようにまとまった。



今回、授業で自分の研究の目的・目標・手段について考えることで、自分の研究の全体像が少し見えてきたと感じた。今後、研究を進めるにあたって、研究の方向に迷いが出てきて、わからなくなった時には、この図を思い出し、研究に取り込んでいきたいと考える。

### 小野先生のお話の概要

目的と目標は似たようなものだが、違うものである。目的は達成したい最終的な結果である。目標はその結果を実現するための必須条件となる。そして、目的にせよ、目標にせよ、そこにたどり着くのに手段が必要である。この三つの要素が揃って初めて目的と目標に近づくことができる。

ただ、人によっては目的と目標の設定が違うため、そこにたどり着く手段も変わってくる。また、目的によってはそれが達成された時点で進むべき方向を見失ってしまう場合もある。

また、目的と目標は常に同じものであるとは限らず、時間が経てば変わってしまう場合があるため、目標と手段もそれに合わせて変えないといけない。しかし、手段にとらわれすぎると、いつまで経っても進めない可能性もあるので、しっかりと区切りをつける必要がある。

しかし、目的、目標、手段がはっきりと分かったとしても、それを最後までやり遂げる意志がなければ、結局達成できないままに終わってしまう。人のペースに飲み込まれずに、自分のペースでやっていくのが一番望ましい。

### 個人の感想

目的を定めて行動することは大事である。もし、目的が分からないままだと何を目標にして行動すればいいかが分からなくなるし、どんな手段で行動すべきかも分からなくなる。

ただ、はっきりとした目的がないまま行動せざるをえない場合も多々あるので、そういうときはやはり行動しながら目的と目標を探していくしかない。したがっているような手段を試してみて、少しずつ目的を明白にしていく。

論文を書くときも多くの場合は最初は手探り状態で、ぼんやりとした目的しかない。先行研究や文献を読んでいくうちにだんだん目的が明らかになる。そして、それに沿って目標などを立てていく。

私の論文はいままだ漠然とした目的があるだけで、残念ながらまだ近いうちに明白になりそうにない。しかし、今の目的に見合った目標の設定はできる。そして、目的に近づくための努力をきちんと積み重ねれば、いずれ目的もはっきりしてくる。大事なのは諦めずに努力し続けていくことだと思う。